Environmental Report 2008
ニッスイ環境報告書

2008年8月発行

日本水産株式会社
環境オフィス

電話　03-3244-4172
FAX　03-3244-7387

〒100-8686
東京都千代田区大手町2-6-2 日本ビル10階

ホームページ　http://www.nissui.co.jp/

ミックス品
FSC認証林及び管理された
森林からの製品グループです
www.fsc.org Cert no. SCS-COC-001466
© 1996 Forest Stewardship Council

PRINTED WITH SOYINK

本誌は環境へのやさしさに配慮して、FSC認証紙と大豆油インクを使用しています。

INDEX

1 ごあいさつ

2 特集1
「エコクリップ」
フィッシュソーセージの生産現場から

4 特集2
ダウンサイジングの現場から

6 企業姿勢と環境保全活動への考え方

8 環境マネジメントシステム
- 環境マネジメントの体制
- ISO14001の認証取得
- 環境リスク管理
- 環境教育・啓発

9 事業と環境とのかかわり

10 地球温暖化の防止に向けたCO_2削減

12 廃棄物の削減とリサイクル

14 水資源の保全

15 コミュニケーション
- 環境協議会
- 地域との交流
- 社会貢献活動

17 環境報告書2007へのご意見

編集方針
この報告書は、ステークホルダーの皆さまに向けて、日本水産(株)の環境への取り組みについて報告するもので、今回で4回目の発行となりました。今回から環境保全活動の数値データについては、日本水産(株)個別に加え、国内の一部のグループ会社も含んで掲載し、内容の充実を図りました。取り組み事例については、数値データ対象会社以外のグループ会社からも紹介しています。

報告対象期間
環境保全活動の数値データについては、2007年度(2007年4月～2008年3月)のデータを掲載しています。
環境マネジメントシステムや具体的な取り組み事例などについては、2007年度の活動を中心に2008年6月までの活動を掲載しています。

報告対象組織
日本水産(株)個別と国内の一部のグループ会社を対象としています。
環境保全活動の数値データは、右記の日本水産(株)の事業所とグループ会社について、事業区分ごとに合算しています。
なお、具体的な取り組み事例などについては、数値データ対象外のグループ会社の活動も含んでいます。

【環境保全活動の数値データの対象となる事業所・グループ会社】
水産事業:日本水産(株)　女川油飼工場・伊万里油飼工場・大井水産加工工場
食品事業:日本水産(株)　女川工場・八王子総合工場・安城工場・姫路総合工場・戸畑工場・調味料工場
モガミフーズ(株)、(株)北九州ニッスイ、日豊食品工業(株)、日本クッカリー(株)、(株)チルディー、群馬フレッシュフーズ(株)、北陸フレッシュフーズ(株)
ファイン事業:日本水産(株)　つくば工場
物流事業※:日水物流(株)

※日本水産(株)の冷蔵倉庫事業部門は分社化し、グループ会社の東部冷蔵食品(株)、西部冷蔵食品(株)との組織再編を行い、2007年4月から日水物流(株)となっています。

参考としたガイドライン
環境省「環境報告ガイドライン2007」

作成部署・連絡先
日本水産(株)環境オフィス
〒100-8686
東京都千代田区大手町2-6-2　日本ビル10階
Tel 03-3244-4172　Fax 03-3244-7387

発行年月:2008年8月
次回発行予定:2009年8月予定

ごあいさつ

ここ2～3年おきている、石油をはじめとする鉱物資源価格の高騰や、バイオ燃料も絡んだ穀物価格の高騰、そして、それに連鎖した途上国での食料危機など、非常に大きな変化がニッスイグループを取り巻く事業環境にも影響を及ぼしています。私はこの押し寄せている変化を「時代の分水嶺」と呼んでいます。この変化のひとつは、地球環境がさまざまな要因の積み重ねで悪化の一途をたどり、気がついたら地球の将来に赤信号が点っていたという現実でもあります。もちろん、人類は何もしなかったわけではなく、自動車の排気ガスを規制する米国のマスキー法や、工場排水を規制する日本の水質汚濁防止法など、実行が困難と思われた規制に対し、積極的に行動した結果、こうした規制を乗り越えてきたことも事実です。

2008年7月、北海道洞爺湖でG8サミットが開催されました。ポスト京都議定書について、真剣な討議が行われ、「2050年までに温室効果ガス排出量を半減する目標を世界各国で共有し、国連の交渉で採択するよう要請する」、という福田首相の議長総括で終了しました。ただ、2020年、2050年の国別数値目標の設定に至るには、来年のCOP15に向けて、まだまだ難しい交渉が続くと考えられます。しかし、ひとつだけはっきりしていることは、世界全体が今、真剣に地球温暖化防止に立ち上がらなければ、後日、子孫がより大きな被害を受けるだろうということです。すでに、豪雨と旱魃、衛生的な水資源の不足、氷河の崩壊、サンゴの死滅、海面上昇などの影響が出始めています。

ニッスイグループは、2003年6月に「環境憲章」を制定し、愚直に環境問題に取り組んで来ました。国際規格のISO14001認証も60事業所で取得しており、CO_2排出量、水使用量、廃棄物排出量の削減などに着実に努めています。

今回の特集でも取り上げていますが、フィッシュソーセージのエコクリップの採用という、従来のアルミニウム製の留め金使用を廃止し、両サイドに新たに開発したフィルムを使用した製品が、環境にも配慮し、健康にも優れた食品であるとして、消費者の皆様から評価をいただき、生産・販売とも、順調に推移いたしました。次に、輸配送の環境配慮から、カートンケースのダウンサイジング、ダウンウエイティング、バンド掛け廃止、共同物流などの取り組みを業界で推進しました。また、川崎物流センターの冷蔵倉庫増設部分の冷凍機には、地球温暖化係数の高い代替フロンに代えて、自然冷媒を採用しました。さらに、東京都からは平成18年度の地球温暖化防止対策計画の取り組みで、特に優れた17事業所のひとつに八王子総合工場が選ばれ、去る6月3日、石原東京都知事より表彰を受けました。

このように、ニッスイグループは「時代の分水嶺」を勇気を持って越えるべく、日々の生産・輸送・保管・販売の現場におきまして、環境に配慮した活動に英知を絞っています。そして、2011年の創業100周年に向けた中期経営計画(新TGL計画 TGL=True Global Links)の実践にあたって「環境経営」の視点からも、さらなる努力を続けて行きたいと考えています。

これからも、皆様の温かいご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

2008年8月
日本水産株式会社
代表取締役社長
垣添直也

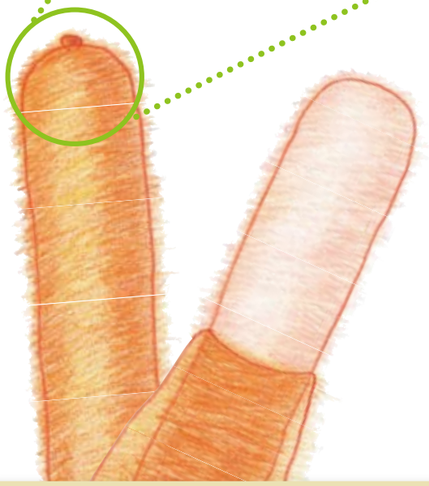
特集1

「エコクリップ」フィッシュソーセージの生産現場から

八王子総合工場

おなじみの留め金が、環境にやさしい「エコクリップ」に。

留め金をなくしてエコクリップに



ニッスイのフィッシュソーセージは、体にやさしい製品として、1952年の生産開始以来、多くのお客さまに親しまれています。一方で、包装フィルムの使い勝手に対して、さまざまな要望をいただいておりました。そのようなお客さまからの声にお応えして、2006年、留め金に代えて独自の新包装「エコクリップ」を開発。開けやすく使い勝手が向上するとともに、家庭でのごみの分別が容易になり、同時にアルミ資源の使用削減が実現できました。

「エコクリップ」で・・・

●ごみの分別がしやすくなりました

家庭ごみのうち、使い終わった容器や包装のごみは、容量で約６割を占めているといわれています。社会的に環境への関心が高まるなか、ごみの分別排出の細分化が広がっており、「エコクリップ」フィッシュソーセージの登場は、「留め金と包装フィルムを分別する手間が省かれた」と、多くのお客さまから好評いただいています。

●年間120tのアルミ使用削減

「エコクリップ」の採用により、従来、留め金に使用されていたアルミの年間120tの削減が実現しました。

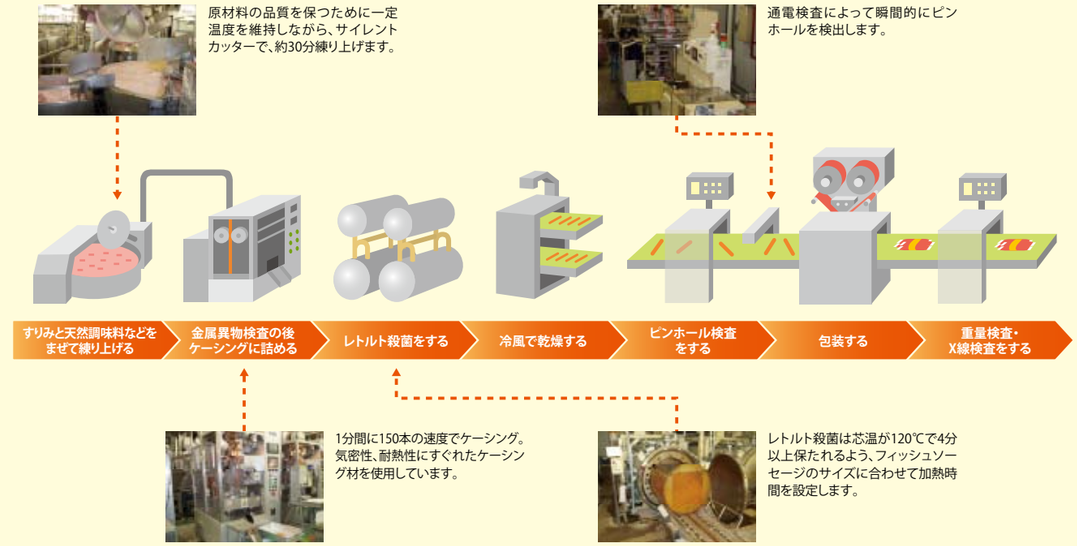
～エコクリップ開発ものがたり～

フィッシュソーセージは、魚肉のすりみを包装フィルムに充填・密封した後、圧力をかけながら加熱して作られます。加圧加熱の工程上、また長期常温保存のためには、密封するアルミの留め金は不可欠でした。しかしながら留め金に関しては、切り取る際に歯や口の中のケガの心配や、ごみ分別への不満もお客さまから寄せられていました。

そこでニッスイでは、10年程前からワイヤレスソーセージの研究に取り組んできました。2004年、協力関係にあった（株）クレハによる、胴体と同じポリ塩化ビニリデン製のクリップテープで超音波を用いて留める技術の確立を受けて、戸畑工場にテスト機を設置。2005年春には、八王子総合工場に3台のテスト機を移設し、戸畑工場と情報を交換しながら実用化に向けたテストを続けました。超音波を強く照射しすぎると包装フィルムに穴が開いてしまい、逆に弱いと中身が飛び出してしまうなどの試行錯誤を経て、2006年9月、最初の「エコクリップ」フィッシュソーセージの実用化に成功。細いサイズから商品化がスタートし、2007年9月には、すべて*のフィッシュソーセージに採用されています。「エコクリップ」の名称は、分別のいらない環境にやさしいことから命名され、2008年2月、商標登録されました。

*包装フィルム材質がナイロン製の商品を除く

フィッシュソーセージのできるまで



【八王子総合工場での環境への取り組み】

エネルギーの転換

地球温暖化が問題になっているなか、CO_2などの温室効果ガスの削減対策が急がれています。ニッスイにおいては、工場で使用される燃料を、石油燃料からCO_2排出の少ない都市ガスへ、エネルギー転換を進めております。2006年1月までに、八王子総合工場は、全14台のボイラー燃料を重油から都市ガスへと転換完了しました。

都市ガスボイラー

廃プラスチックの資源化

フィッシュソーセージの元になる、魚肉のすりみを包んだプラスチック製のシートは、工場内ですりみを取り出した後は、そのまま廃棄されていました。2007年1月からは、工場敷地内に設置した洗浄機で、シートに付着していたすりみをきれいに洗い落とした後、プラスチック資源として有価で売却できるようにしました。

洗浄されたプラスチック類

水を循環利用

充填後のソーセージをレトルト殺菌する際に使用する水を、循環利用することにしました。工場清掃の時間や手順の見直しによる節水などと合わせて、年間約8万tの水使用削減が実現しました。ちなみに8万tの水とは、25メートルのプール約222個分に相当します。

安心・安全な製品づくり

製造工程においては、エコクリップの密封性確保に最大限に注力し、官能検査や品質検査を行っています。また、すりみや調味料など原材料の品質管理を徹底するとともに、購買先への立ち入り検査も実施します。工場間の相互チェックをする品質パトロール、安全パトロールを月1回行うほか、消費者目線で巡回する間接部門によるパトロールを、2008年3月から始めました。

八王子総合工場

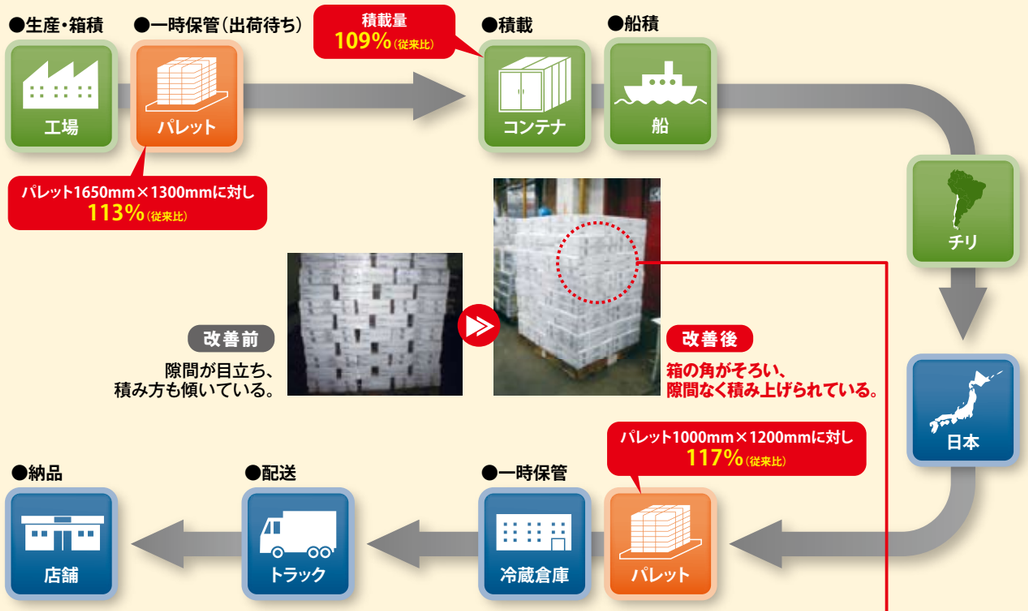
日本水産グループ最大の中核工場として、ソーセージやちくわなどの加工食品、焼きおにぎりなどの冷凍食品を生産しています。研究開発・物流機能を関連施設として併せもち、最高水準の品質管理を行うとともに、総合力を生かした業務展開を推進しています。

物流効率の視点から、包装資材の削減へ

「冷蔵倉庫は、効率的に活用されているのか?」

当初、物流コスト削減を目的に始まった取り組みは、あらゆる物流段階の見直しを経て、段ボール製外箱のサイズ変更や積載方法の工夫に発展しました。その結果、外箱や緩衝材などの包装資材の削減、さらに物流の効率向上による冷蔵倉庫の省エネルギーやトラック輸送時のCO_2排出削減と、環境への波及効果も大きいものとなりました。ニッスイでは、これらの取り組みを広げていこうと考えています。

【ダウンサイジング・サーモン5kg箱の取り組み事例】



928品目のサイズ調査から

2006年1月15日、経営革新会議タスクフォースメンバー16名が、メジャーを片手に東京物流センターの冷蔵倉庫に集まり、928品目にわたる商品外箱の採寸を始めました。前月、物流部門からあがった「冷蔵倉庫は、効率的に活用されているのか?」を検証する前提として、まずは個々の商品サイズを調査してみようというものでした。従来、外箱は、個々の商品に合わせて生産工場が発注していたため、商品部や物流部門は、外箱の形やサイズを気にも留めていなかったのです。社内部門を横断するクロスファンクショナルな取り組みのひとつであるダウンサイジングが動き始めました。

外箱をダウンサイジング(サーモン5kgの外箱の場合)

1. パレット面積から1段に7箱に決定。
2. 冷蔵倉庫の高さ・アングル付パレット・自動冷蔵倉庫の高さ制限から、1ユニット=7箱×7段積みに決定。
3. 1 2 から外箱サイズを333mm×500mm×95mmに決定!

改善後 333mm×500mm×95mm
改善前 351mm×587mm×83mm

物流パレットに着目

採寸の結果、さまざまな商品がダウンサイジングの候補にあがり、各担当が中心となって製造現場との調整が始まりました。そうしたなか主力製品であるサーモンの取り組みが先行しました。サーモンでまず着目したのは、パレットの大きさです。商品が詰め込まれた段ボール箱を載せたパレットは、パレットごとフォークリフトで冷蔵庫に運び込まれます。しかし外箱のサイズとパレットのサイズが合わないので、隙間のある積み付け方となっていたのです。そこで、国内だけでなく、南米・ヨーロッパ・アメリカの海外事業所に問い合わせて、使用しているパレットの大きさを調べました。その結果、最もスタンダードであったパレットサイズ(縦1000mm×横1200mm)を設定し、それに合わせた外箱サイズ(縦333mm×横500mm)が決定されました。

冷蔵倉庫の高さを測定

外箱の縦と横のサイズは決まりましたが、高さについては、商品にダメージを与えないことを前提に、冷蔵倉庫の大きさとアングル付きのパレットのアングルの高さが問題になりました。冷蔵倉庫の天井までの高さは、各所によってバラつきがあり、またアングル付きのパレットは高さが限定されてしまいます。そこで、自動冷蔵倉庫とアングルの高さ、物流トラックの高さ(間口)を勘案し1000mm×1200mm×1150mmを1ユニットとして、効率的な外箱の高さを決めることになりました。

輸送テストの実施

2006年4月、比較検討のため新旧サイズの外箱に入ったサーモン各1コンテナ(約20t)がチリを出発、長旅の後、大井倉庫に到着し、早速、検品作業が行われました。心配された外箱の潰れや真空パックの漏れはなく、輸送テストは成功に終わりました。この結果を受け、2006年9月にダウンサイジングによるサーモンの流通がスタート。サーモン5kg箱の場合、1パレット当たり冷蔵倉庫保管117%、コンテナ輸送109%と外箱サイズの統一による積載量の向上を図ることができました。また、外箱が小さくなったため緩衝材が不用となり、お客さまにとっても緩衝材を廃棄する手間が省かれることになりました。

ダウンサイジングの広がり

サーモンの成果を受け、ダウンサイジングの取り組みはさまざまな商品に広がっています。外箱だけではなく、商品パッケージも見直しの対象とし、「五目春巻」のトレイの軽量化がなされました。小型化や薄肉化の活動は、その後も引き続き実施していきます。また、(社)日本冷凍食品協会や(社)日本冷蔵倉庫協会では、外箱サイズ標準モジュール化やダウンサイジング等の共同研究、冷凍食品のバンドレス化推進などを実施していく予定であり、ニッスイもそれらの取り組みに協働してまいります。

日本とチリ・サケ加工工場の連携

水産事業部 水産第2課(当時)／盛和美

発端となった冷蔵倉庫での採寸でダウンサイズの可能性を知り、真っ先に鮭鱒に取り組みました。ただ、生産工場が地球の反対側のチリであることもあり、外箱の変更は簡単ではありませんでした。外箱のサイズを決定するまでにはさまざまな情報収集を行い、チリの前田さんとは生産効率・積み付け効率・資材費など事細かに打合せをしながら進めました。輸送テストのコンテナが届き、商品に問題がないことを確認した時は、ほっとしました。変更後、お客さまからも「コンパクトになり、扱いやすくなった」と好評をいただいております。お客さまにとっても、社会(環境)にとっても、ニッスイにとってもメリットのある結果になり、良かったと思っています。

サルモネス アンタルティカ社(当時)／前田充穂

盛さんから、初めに物流効率の見直しの話を聞いたとき、「これはいける!」と思いました。従来から、積み重ねた時に一部潰れがあることやコンテナにムダなスペースがあることを知っていたからです。冷蔵倉庫での積み付けの検証、コンテナへの搭載数のテスト、緩衝材の有無の検査など、2カ月後にはチリから日本に向けてテストコンテナを送り出しました。物流効率の視点から始まったダウンサイジングの取り組みは、生産現場にとって新鮮なものでした。

春巻のトレイを小さく! 家庭ごみの削減へ

家庭用食品部 冷凍食品課／坂井静香

冷凍食品にはお弁当用の商品を中心に、プラスチック製のトレイが使われています。小分けにしてトレイごと電子レンジで温められるという利点がある一方、お客さまには冷凍庫内でのかさばりやごみが多いなどの面で懸念される傾向にありました。そこで「五目春巻」においては、商品改良の際にできるだけコンパクトなトレイにしようと、姫路総合工場とともに取り組みを行いました。以前から工場では小集団活動において外箱のダウンサイジングは行っていました。生産ラインの改造までに踏み込んでの今回の取り組みは、困難もありましたが工場の各担当とともに検討を重ねて実現に結びつけました。それぞれの部署がこの活動に共感して進めたことで、プラスチック資源の削減や、物流効率の改善について環境への意識も高まったと思います。

企業姿勢と環境保全活動への考え方

ニッスイは、自然環境から育まれる資源を使わせていただく事業を営んでおり、自然の恩恵を最大限に世界の人々のために役立たせながら、将来に継承することが私たちの責務であると考えています。
約1世紀にわたって受け継がれてきたニッスイの遺伝子のもと、企業姿勢宣言や環境憲章で掲げた環境への考え方を基本に、グループ会社とともに環境保全活動に取り組んでいます。

創業の理念
（1911年）

創業の功労者　國司浩助の言葉

**水の水道におけるは、
水産物の生産配給における理想である**

＜経営の基本方針＞

- ●水産物のグローバルサプライチェーンを構築する。
- ●品質とコスト、研究開発とマーケティングを重視する。
- ●自らの仕事の先端分野に挑戦し、それを開拓する。
- ●地球や海の資源を持続的に有効活用し、環境を大切にする。
- ●企業としても個人としても折り目正しい行動をする。

中期経営計画「新TGL計画」
（2006年4月制定）

「新TGL計画」は、2011年の創業100周年に向けて2006年に制定した中期経営計画

【ニッスイのミッション】
「水産資源から多様な価値を創造し、お客様にお届けすることを通して、世界の人々の健康で豊かな生活の実現に貢献する」

企業姿勢宣言
（2003年4月）

【お客様への姿勢】
- ・私たちは全ての視点をお客様の価値・お客様へのお役立ちにおく。
- ・私たちの業務活動はお客様に向けて始まる。
- ・企業の価値はお客様が決め、報酬はお客様からいただく。
- ・私たちはこれらが事業の原点であることを共通の認識とする。

【社員への姿勢】
- ・企業は人によって成り立ち、人によって成果が決まる。
- ・社員は先ず個人として互いに尊重され、公平な機会が与えられなければならない。
- ・自己責任の原則のもとでの生きがい・働きがいの実現と自己成長は社員の大きな喜びである、当社はその実現の場を提供する。

【社会への姿勢】
- ・私たちはお客様を基点とし、正しい行動をしつづけることで世の中に存続できることを自覚し、さらに環境や地域社会に対しても積極的配慮を怠らない。
- ・私たちは自然の恵みを受けて仕事をするのであり、資源を大切にし、地球や海に感謝の心をもって接する。

【株主への姿勢】
- ・私たちは日本水産に投資していただいた株主を尊重し、利益の適切な配分を継続的に行う。
- ・正しい企業活動から得た利益とともに、企業価値の向上を通じた株主への還元もまた、私たちの努力の常なる目標でなければならない。

倫理憲章
（2003年4月制定）

品質保証憲章
（2002年10月制定）

環境憲章
（2003年6月制定）

環境理念

自然の恵みを受けて仕事をする当社においては、資源を大切にし、地球や海に感謝の心を持って接することを企業姿勢の基本としています。
私たちは、地球環境と調和・共生できるような、グローバルな事業活動を展開し、持続可能な社会の構築に、継続的に取組みます。

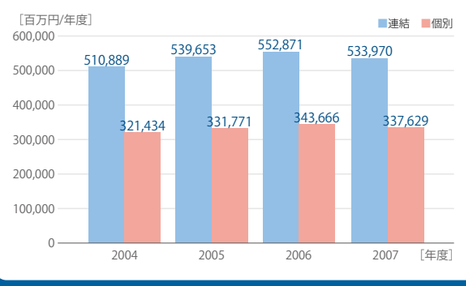
行動方針

①自然環境の保全と、資源の持続的利用に配慮した活動を推進します。
②省エネ、省資源、廃棄物の削減、容器包装の減量化、グリーン購入等による環境負荷低減活動を通じ、循環型社会形成に向け、継続的に努力します。
③環境マネジメントの仕組みを構築し、その効果的な運用を目指します。また、環境監査を実施し、環境関連の法規制等の遵守を徹底します。
④環境教育を通じて、社員一人一人の環境意識の向上を図ります。
⑤社会に対して、環境コミュニケーション活動を行うとともに、地域社会との環境に配慮した共生を重視して行きます。
⑥この環境憲章は、グループ各社においても共有化するように努めます。

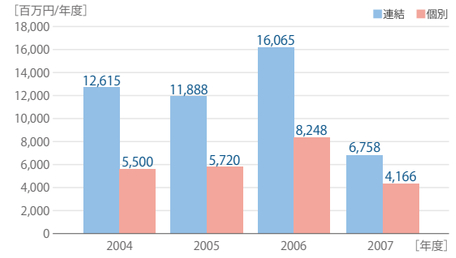
会社概要（2008年3月末現在）

商号	日本水産株式会社
本社所在地	〒100-8686 東京都千代田区大手町2-6-2　日本ビル10階
創業	1911（明治44）年
設立	1943（昭和18）年
資本金	23,729百万円
主な事業	水産事業：水産物（生鮮魚・冷凍魚・油脂（魚油）・ミール（飼料））の漁獲・養殖・買付・加工・販売 食品事業：冷凍食品、缶詰・びん詰、その他の加工品（フィッシュソーセージ・ハム・練り製品・チルド食品・調味料）の開発・製造・販売 物流事業：冷凍・冷蔵保管、冷凍・冷蔵貨物の運搬 ファイン事業：医薬原料、健康食品の製造・販売

■売上高（2004—2007年度／連結・個別）



■経常利益（2004—2007年度／連結・個別）



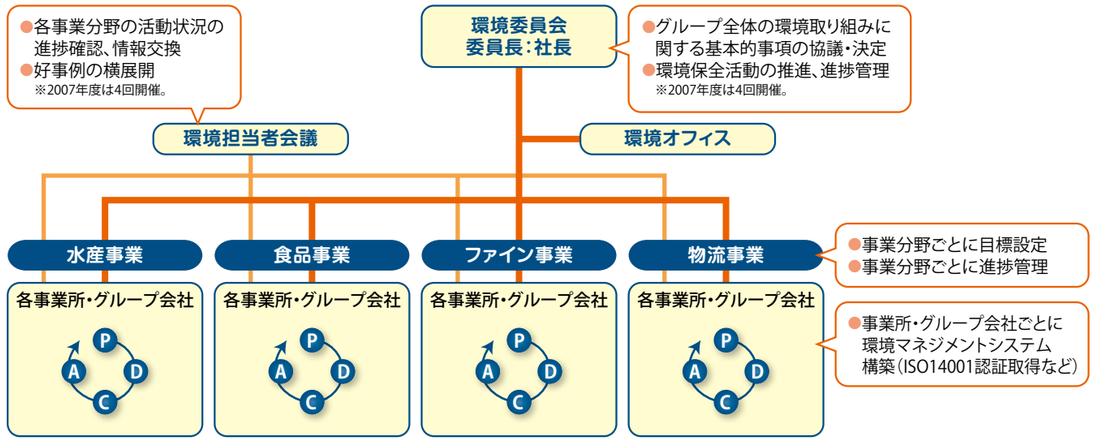
■従業員数（2004—2007年度／連結・個別）

環境マネジメントシステム

ニッスイでは環境マネジメントシステムを構築し、事業活動の過程で発生する環境負荷を最低限に留めるよう、環境保全活動を推進しています。

環境マネジメントの体制

グループ全体の環境取り組みを統括・推進するために、環境委員会を設置しています。また、環境憲章に基づき、各事業分野の事業所およびグループ会社ごとに環境マネジメントシステムを構築し取り組んでいます。環境オフィス（2006年6月設立）では、各事業分野での環境負荷削減状況の進捗確認や情報交換、好事例の横展開などを行っています。



ISO14001の認証取得

環境マネジメントシステムの国際規格であるISO14001の認証取得を推進しています。2008年6月末現在、ISO14001の認証を取得している事業所は、直営事業所およびグループ会社合わせて60事業所です。

環境リスク管理

環境事故・トラブルの発生状況

2007年度は、国内工場で油もれ事故が1件発生しましたが、環境に重大な影響を与えるものではありませんでした。これについては速やかに対処し、改善が完了しています。

環境関連法令の遵守状況

2007年度は前年に引き続いて、大気、水質、臭気、騒音、振動に係る法令等の基準をクリアしています。
また、食品リサイクル法、省エネ法、地球温暖化対策推進法についても適正に実施しています。

環境教育・啓発

新入社員教育

新入社員教育の課程において、ニッスイの事業活動に関わる環境リスクや法律の動向、ニッスイの環境保全活動等について学習しました。2007年度は26人が受講し、ニッスイに関わる環境問題や法律の動向、ニッスイの環境保全活動等について学習しました。

環境担当者教育

各事業所・グループ会社の環境担当者が参加する環境担当者会議において、ニッスイに関わる環境問題や法律の動向等についての学習会を行っています。2007年度は4回実施し、食品リサイクル法や省エネ法等について学習しました。

事業と環境とのかかわり

自然の恵みをいただいて、鮮凍品（鮮魚、冷凍魚など）の買付・養殖・製造・販売、食品（冷凍食品、フィッシュソーセージなど）や化成品（EPA、DHAを含む医薬品など）の製造・販売を事業としています。また、これらを支える冷蔵倉庫事業、配送センター事業も行っています。

＜2007年度ニッスイエコバランス＞

注）INPUT、OUTPUTの数値データは、報告対象組織に示した日本水産（株）個別の事業所と国内の一部のグループ会社のデータです。

環境保全活動

地球温暖化の防止に向けたCO2削減

地球温暖化の防止に向けて、省エネルギーやCO2排出係数の小さいエネルギーへの転換、自然エネルギーの利用などによりCO2排出量の削減が進んでいます。

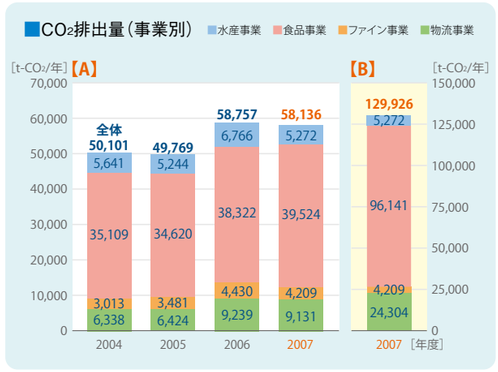
CO2排出量

【A】※

2007年度のCO2排出量は58,136t-CO2/年で、2006年度(58,757t-CO2/年)に比べ約1%減少しました。
生産数量は前年度比約4%伸びており、排出原単位(CO2排出量/生産数量)では約5%減少しました。

【B】※

2007年度のCO2排出量は129,926t-CO2/年でした。
事業別では、食品事業が約74%を占めています。
使用しているエネルギー別の排出内訳では電力が約68%で、都市ガスが約16%、LPGが約8%などでした。



※環境保全活動(P10～14)では、グラフや数値などの対象組織を、【A】、【B】の二通りで報告しています。

【A】2007年版と同一の報告対象組織(前年度までと比較するため)

水産事業:日本水産(株)女川油飼工場、伊万里油飼工場、大井水産加工工場
食品事業:日本水産(株)女川工場、八王子総合工場、安城工場、姫路総合工場、戸畑工場、調味料工場
ファイン事業:日本水産(株)つくば工場
物流事業:日水物流(株)の事業所のうち、東京物流センター、川崎物流センター、大井第一物流センター、平和島物流センター、安城物流センター、六甲物流センター

【B】本書2008年版の報告対象組織(左記【A】に、下記事業所を加える)

食品事業:モガミフーズ(株)、(株)北九州ニッスイ、日豊食品工業(株)、日本クッカリー(株)、(株)チルディー、群馬フレッシュフーズ(株)、北陸フレッシュフーズ(株)
物流事業:日水物流(株)の左記以外の11事業所

CO2排出量削減の取り組み

CO2排出量を削減するため、CO2排出量の少ない省エネ機器への転換や自然エネルギーの活用、機器の効率的な運転などを行っています。また、四国での共同配送など、冷凍食品メーカーで協力してCO2削減の取り組みも行っています。

取り組み事例

日よけの設置で電力量の削減〈日豊食品工業(株)〉

日豊食品工業(株)の工場では、折板葺きの屋根の温度が70℃以上になり、工場内の室温も37℃にまで上昇します。そこで屋根の上に日よけを設置し、また井戸水を使用したスプリンクラーで15分に1回程度の割合で散水を行いました。その結果、室温を4℃下げることができました。スプリンクラーの運転については、運転時間を日報に記録・管理し、無駄な運転を防止しています。

効率化運転による省エネ〈安城工場〉

ニッスイの工場では、凍結装置へのインバーターの設置やエアーコンプレッサーの配管経路の見直しなどを行い、効率化運転に努めています。安城工場では排水処理施設において、処理水中の溶存酸素濃度をセンサーで感知して、その情報を散気装置に送り運転を行っています。これにより約10%の省エネに結びつけています。

取り組み事例

川崎物流センター〈日水物流(株)〉

日水物流(株)が2008年4月1日に川崎物流センター(東扇島)に増設した新館の冷凍庫では、フロンガスの代替として、自然冷媒であるアンモニアとCO2冷媒を採用しました。オゾン層破壊や温室効果ガス排出抑制の観点から、ノンフロンガスの冷媒を積極的に取り入れ、地球環境への負荷低減を図ります。高効率圧縮機を採用したこの冷凍庫は、約20%の省エネルギーを実現するとともに、間接冷媒方式のため高い安全性も確保できました。
また、新館屋上450平方メートルには、メキシコ万年草やトベラを植えて緑化し、環境に配慮した倉庫となっています。

川崎物流センター

新館の屋上の緑化

前川製作所製の新型冷凍機
NewTon 3000

四国での共同配送

物流におけるCO2排出削減に向け、2006年度から四国地区において、冷凍食品メーカー3社(日本水産(株)、味の素冷凍食品(株)、(株)ニチレイフーズ)で共同物流を行っています。すでに、1999年より北海道、さらに南九州、中京の3地区で共同物流を実施してきましたが、四国地区では、商品を共同保管するなど、物流効率を重視した本格的な取り組みです。
従来、冷凍食品メーカーは、各社ごとに取引先(食品卸、量販店等)の指定する物流センターへ納品し、冷蔵倉庫や輸送トラックの手配も自前で行っていました。四国地区での共同物流においては、3社の商品を大阪の同一冷蔵倉庫で保管し、この拠点から取引先の物流センターに3社分を一括して輸送します。これにより、物流コストの削減はもとより、排出するCO2は、従来に比べ10～20%程度削減される見込みです。

八王子サイト、東京都より地球温暖化対策で受賞

八王子サイトは、地球温暖化対策の取り組みが優れた17事業所のひとつとして、2008年6月に石原東京都知事より表彰を受けました。
東京都は、温室効果ガスの排出量が多いオフィスビルや工場などの事業所を対象に、地球温暖化対策計画書の提出を義務づけています。八王子サイトは、1)ボイラーを更新しA重油から都市ガスに燃料転換、2)照明器具を省エネタイプに交換するとともに、人感センサーを併設、などといった平成18年度の取り組みにより、総量削減率で13%削減し、特に優秀と認められるAAAの評価を受け、受賞に至りました。

東京都地球温暖化対策
優秀事業所表彰式

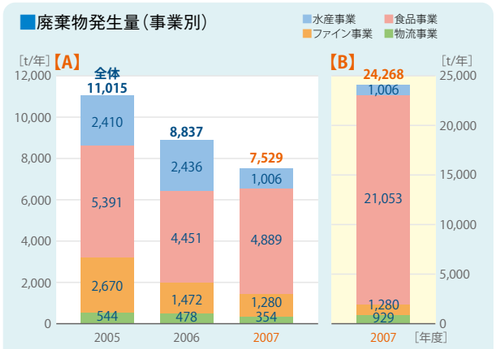
環境保全活動

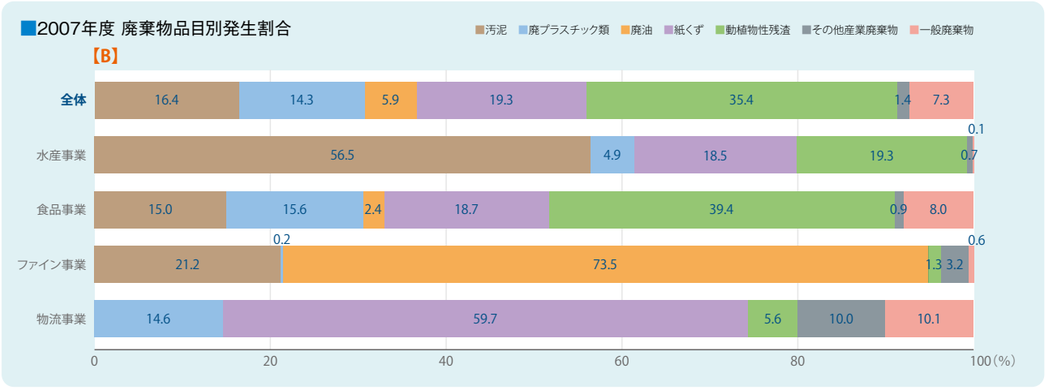
廃棄物の削減とリサイクル

廃棄物の削減においては、第一に発生抑制に努めています。
また、残渣や使い終わった資材などについては、有効活用を目指し、さまざまなリサイクルに取り組んでいます。

廃棄物発生量

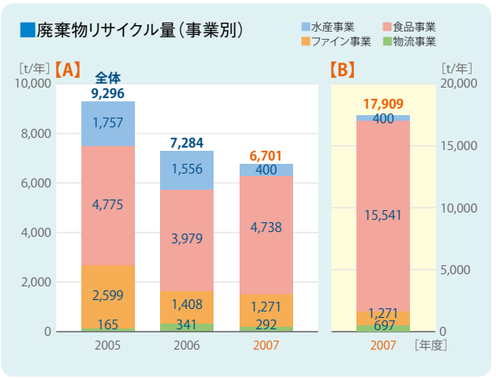
【A】
2007年度の廃棄物発生量は7,529t/年で、2006年度（8,837t/年）に比べ約15%減少しました。これは、水産事業の品目見直しによる事業所の閉鎖が主な要因です。
【B】
2007年度の廃棄物発生量は24,268t/年で、全体の約87%が食品事業での廃棄物でした。
廃棄物の品目別では、動植物性残渣が約35%、紙くずが約19%、汚泥が約16%、廃プラスチックが約14%です。
事業別でみると、水産事業では汚泥、食品事業では動植物性残渣、ファイン事業では廃油、物流事業では紙くずが最も多く発生しています。



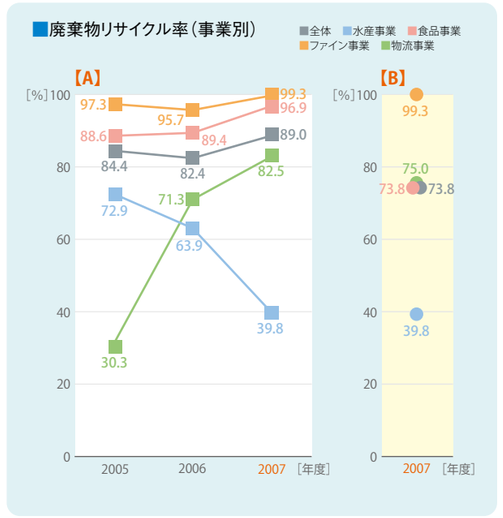


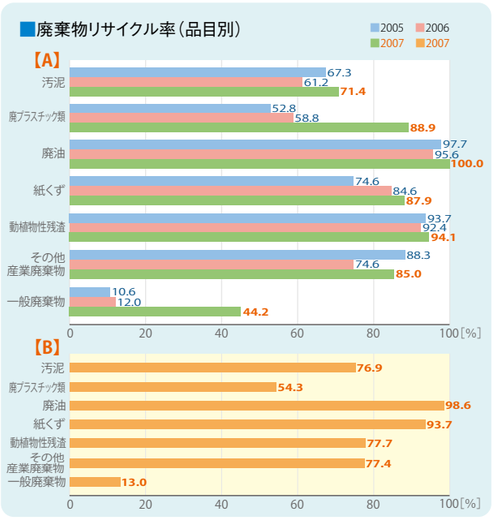
リサイクル量

【A】
2007年度のリサイクル量は6,701t/年、リサイクル率*1は89.0%でした。2006年度に比べリサイクル率（82.4%）が約7%上昇しました。事業別ではファイン事業でのリサイクル率が約99%となっています。また、物流事業でのリサイクルが伸びています。
【B】
2007年度のリサイクル量は17,909t/年、リサイクル率は73.8%でした。
リサイクル率の品目別では、廃油が98.6%、紙くずが93.7%と90%を超え、また動植物性残渣、汚泥も80%近くとなっています。
事業別では、ファイン事業でのリサイクル率が高く約99%でした。



*1 リサイクル率（%）＝リサイクル量／廃棄物発生量×100





廃棄物処理・処分量

【A】
リサイクルできない廃棄物は、外部の処理業者に委託して適正に処分をしています。
2007年度の廃棄物の処理・処分量は828t/年で、2006年度（1,553t/年）の約53%と、大きく削減することができました。これは、食品事業、物流事業でリサイクル率が伸びていること、ファイン事業でリサイクル率を高率で維持していることが寄与しています。
【B】
2007年度の廃棄物の処理・処分量は、6,359t/年でした。

廃棄物処理委託業者の適正管理

廃棄物処理・処分の委託先である処理場・処分場の現地確認を年1回、サイトごとに実施することを義務付けています。現地を訪問し実際に目にすることで、外部委託した廃棄物が適正に処理・処分されていることを確認しています。

廃棄物削減の取り組み

廃棄物の発生抑制にまず第一に取り組み、あわせてリサイクルも推進しています。製造工程上、やむなく発生してしまう野菜くずなどは、粉砕・脱水して減容化に努めています。

取り組み事例

野菜くずの減容〈モガミフーズ（株）〉

モガミフーズ（株）では冷凍食品の製造をしており、原材料として多くの野菜を使用するため、洗浄・選別工程を経るなかで、どうしても野菜くずが発生します。当初はそのまま廃棄していましたが、ディスポーザーを設置することにより、主にキャベツの選別くずを粉砕・脱水し、廃棄物の容量削減に努めています。

原材料の重量変更による廃棄物の削減〈（株）北九州ニッスイ〉

（株）北九州ニッスイでは、冷凍食品「大学いも」の原材料にさつまいもを使用しています。
このさつまいもの1箱あたり重量を、製造する際の1配合と同量に変更することに取り組みました。
その結果、廃棄となるダンボールを約4.7t削減することができました。

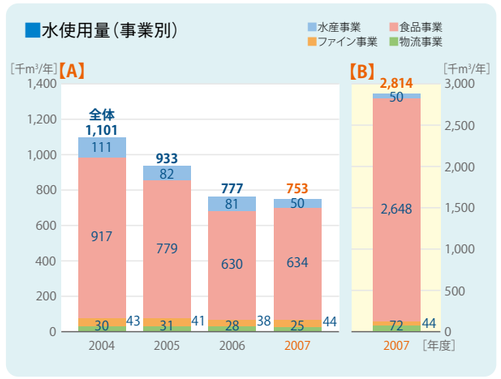
環境保全活動

水資源の保全

ニッスイの事業にとって、水は欠かすことのできない大切な資源です。工場では、節水や水の再利用などを積極的に実践しています。

水使用量

【A】
2007年度の水使用量は753千m³/年で、2006年度（777千m³/年）に比べ約3%削減しました。
【B】
2007年度の水使用量は2,814千m³/年で、うち食品事業が約94%となっています。
なお、水の供給源は、井戸水が約44%、水道水が約41%、工業用水が約15%でした。



水使用量削減の取り組み

工場で使用する水の削減に向け、従業員参加の小集団活動などを通じて、さまざまな取り組みを繰り広げています。工夫の積み重ねが、水の使用量の削減に繋がっていきます。

取り組み事例

小さな工夫で節水活動

製造工場では水の使用時に、水量の調節をついウッカリ忘れてしまったといったミスをなくしていくため、タイマーやセンサーを使用して水槽に定量の水が溜まる装置や、バルブを二重にして決められた水量となるようにするなど、小さな工夫を積み重ねて、節水に取り組んでいます。

解凍水や洗浄水の削減

ニッスイの工場では、原材料の解凍や洗浄に多量の水を使用します。各工場では従業員参加の小集団活動などを通じて、その適正量を考慮しながら、解凍温度や洗浄圧力の見直し、流水から溜め水への変更などで、水の使用量の削減に努めています。

コミュニケーション

ニッスイは社会の一員として、社会とともに発展・共存していくことを目指し、社会貢献に取り組んでいます。

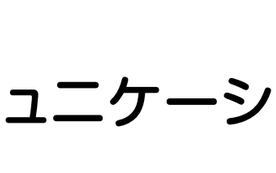
環境協議会

ニッスイおよびグループ会社の事業所が複数集まっているサイトでは、テナント会社も含め、環境協議会を設置し、お互いにサイト内で協力しながら環境取り組みを推進するとともに、地域との共生活動も推進しています。2007年度末現在、八王子、伊丹、箱崎、小倉の各地域で環境協議会が活動を行っています。

八王子は2007年10月に、伊丹は2008年5月に節目の50回を迎えました。今後も継続していきます。また、日水物流（株）東京物流センターや川崎物流センターなどの大型の物流センターでは、テナント各社と協議会を設置し、環境取り組みを推進しています。

地域との交流

●車椅子を寄贈（日水製薬（株）結城工場）
日水製薬（株）結城工場では、納涼大会の模擬店の売上金より車椅子2台を購入し、平成8年より結城市に寄贈しています。納涼大会は30年以上前から毎年8月に、社員とその家族および地域住民との交流の場として開催しているもので、車椅子寄贈は、結城市の市民広報にも紹介されたことがあります。


納涼大会風景

●養殖場・加工場見学（黒瀬水産（株））
2008年3月1日、串間市自然体験実行委員会の主催による「黒瀬水産漁場および加工場見学会」が開催され、小学生の親子13名が黒瀬水産（株）を訪れました。加工場では、初めて着る白衣に戸惑いながらも、魚が加工されている様子を興味深く見学し、海上の養殖場で給餌体験した際には、生簀内の魚のすばやい動きに歓声が上がりました。また、取れたてのブリの調理実習も行われ、刺身やあら汁に舌鼓を打っていました。

養殖場・加工場見学（黒瀬水産（株））

●工場開放デー（安城工場）
安城工場では、毎年夏休みに、工場を開放し地域の住民の方々を招待する「工場開放デー」を実施し、住民の方々といっしょにゲームや会食を楽しんでいます。

●夏祭りへの参加（八王子サイト）
八王子サイトでは、毎年、地元八王子市北野町の夏祭りにソーセージの協賛を行うなど全面協力し、地域との共生を図っています。2007年も「お神輿担ぎ」に男女23名が参加し、ゴールの北野天満社まで約６時間、町内を練り歩きました。

お神輿担ぎ

●小学生の工場見学（戸畑工場）
毎年秋、戸畑地区の小学校8校から3年生約500名が、戸畑工場へ社会科見学に訪れます。子供たちは製品がロボットで箱詰めされる工程に驚いたり、質問コーナーではユニークな疑問や意見が取り交わされました。後日、見学の様子が「ニッスイおさかな新聞」としてまとめられ、工場へ届けられています。

工場見学後に小学生が作成してくれた「ニッスイおさかな新聞」

社会貢献活動

●「海とさかな」自由研究・作品コンクールへの協賛

ニッスイは、朝日新聞社および朝日学生新聞社が主催する「海とさかな」自由研究・作品コンクールに協賛しています。海とさかなの自然を科学しながら、体験を通じて学ぶ小学生の研究や作品を対象に、2007年度で26回目を迎えました。第26回の応募作品は23,416点にのぼり、個人応募数1,015作品、参加学校1,136校・団体で、1982年のスタート以来の応募総数は469,993作品となりました。

文部科学大臣賞
『ぼくはメバル博士2』

朝日新聞掲載
『海とさかな』

●魚譜ポスター「海からの恵み」（生息層編）の発行

当社が所蔵する「魚譜」原画を使用したオリジナルポスター「海からの恵み」を制作し、配布しています。原画は、昭和初期に当社の前身である共同漁業株式会社の魚類研究者であった故熊田頭四郎氏が、画家の有田繁氏、富田喜久枝氏の協力を得て、魚の輪郭・細部・色彩を分類学上正確に描き、また日本画の手法で描写・彩色されたものです。2006年「体型編」、2007年「資源・環境編」に引き続き、2008年５月に「生息層編」を発行いたしました。監修を坂本和弘氏（恩賜上野動物園副園長）にお願いし、魚類の生息層について考察しながら63種の魚譜を抽出・整理・配置いたしました。

2008年『海からの恵み』
（生息層編）ポスター

（独）海洋研究開発機構
施設見学会

（独）水産総合研究センター
中央水産研究所での体験学習

●清掃活動

ニッスイおよびグループ会社では、事業所周辺の清掃を月1回程度の頻度で定期的に行っています。また、地域住民の皆さまとともに、川や海、埠頭の清掃活動も実施しています。八王子サイトでは月1回「ゴミクリーンデイ」を実施し、工場外周および周辺の清掃活動を行っています。この活動で工場周辺が年々きれいになっていることを毎年6月開催の八王子環境フェスティバルで紹介されました。

日豊食品工業（株）
「清掃活動」

八王子サイト
「ゴミクリーンデイ」

●地域環境啓発活動への参加

八王子総合工場および調味料工場は、2008年3月、路上喫煙防止条例の周知・啓発キャンペーンに参加しました。昨年の条例施行からたばこのポイ捨てが3割減少し、特別禁止地域が拡大され、その周知に協力しました。

●自然保護基金への寄付

日本経団連自然保護基金は、アジア太平洋地域や国内の自然保護プロジェクトを対象とし、2007年度は、国内外59件のプロジェクトに総額1.8億円を支援しました。ニッスイは常任理事会社として、この自然保護基金に寄付を行っています。

●（財）漁船海難遺児育英会への寄付

ニッスイは、当社役員および従業員、並びにNAC（日本水産労働組合）、海上従業員親睦会の協力により、（財）漁船海難遺児育英会に、1970年の開設以来毎年寄付を行っています。なお、当社の海上従業員遺児1世帯2人も、育英資金の給付を受けています。

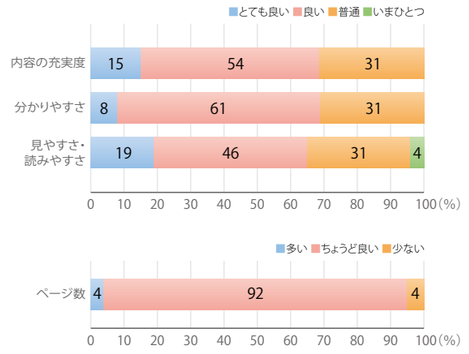
●ニッスイ・研究ファンド

水産資源と海洋環境を大切に育み、その価値を顕在化させ、より高度に転換させるための創造的、あるいは萌芽的な研究に対して、2004年より研究助成を行っています。
2007年度は、応募いただいた研究テーマの中から、東南アジアの複合養殖池における給餌・施肥方式の最適化に関する研究など、5件の研究に対し助成を行いました。

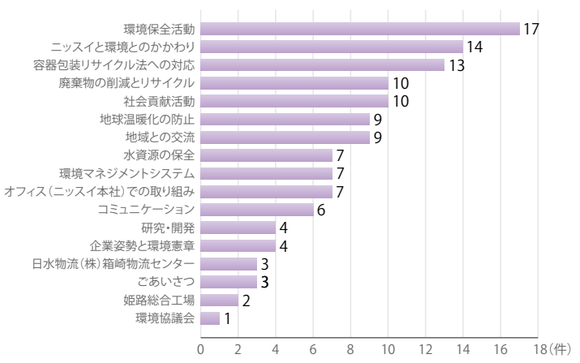
環境報告書2007へのご意見

「環境報告書2007」に対し、アンケート形式で26人の方からご意見をいただきました。

■環境報告書全体を通しての感想（印象）



■特に関心・興味を持てた項目（複数回答可）



編集後記

多くの方々のご協力をいただき4回目の環境報告書を発行することができました。今回から日本水産（株）個別に加えて、一部ではありますがグループ会社の環境保全活動の数値データを掲載することができました。環境取り組みはグループ全体に広がりを見せ、また、従業員一人ひとりが重要な役割を担います。今後も一歩ずつ着実に歩みを進めてまいります。この報告書を通じてステークホルダーの皆さまへ有用な情報をお伝えできるよう、これからも読みやすい紙面を心がけてまいります。同封のアンケートなどで、皆さまのご意見・ご感想をお聞かせいただければ幸いです。